

補中益気湯が医王湯たる由縁

柳原 茂人 大阪市立大学大学院 医学研究科 皮膚病態学 (大阪府)
(2014年4月より、鳥取大学医学部 感覚運動医学講座 皮膚病態学)

はじめに/皮膚科漢方

私が大阪市立大学の皮膚科の医局に入ったのは7年前。医学部で習う授業のかたわら東洋医学の勉強もしていた私は、華岡清州のように西洋医学も東洋医学も、そして外科も内科もできるような医師になりたいと思い皮膚科に進むことを決めました。皮膚科に入ってまず驚いたのは、皮膚科特有の漢方の使い方です。

たとえば皮膚科で頻用される処方の一つ、白虎加人参湯はもとは『傷寒論』や『金匱要略』を原典とし「桂枝湯ヲ服シ、大イニ汗出デテ後、大イニ煩渴シテ解サズ。脈洪ニシテ大ナル者ハ白虎加人参湯之ヲ主ル。」(『傷寒論』太陽病上篇)や「太陽ノ中熱ハ、渴是レ也。汗出デテ悪寒シ、身熱シテ渴ス。白虎加人参湯之ヲ主ル。」(『金匱要略』瘧湿喝病篇)りなどのように、太陽病の経過中、脱水傾向に陥った病態に使用する処方であるということは本で勉強して知ってました。皮膚科に進もうと決めていた私には縁のない処方だと思っていました。

入局したての新入りはシュライバーという、先輩先生の診察につく仕事に当てられます。そこで諸先輩方の処方を見て実際の診療を勉強するのですが、アトピー性皮膚炎などの湿疹病変に対してこれらの漢方処方を併用して皮膚の赤みを取っておられる先輩諸先生をみて、皮膚科漢方のおもしろさに志を新たにしたいのを覚えています。石膏含有製剤で皮膚の赤みを取るだけでなく、乾燥性皮膚に人参や知母のような滋陰剤で潤す、あるいは越婢加朮湯にあるように麻黄+石膏の組み合わせで止汗作用を増強させるなど、生薬の組み合わせの妙を使うことにより、本来皮膚疾患を目標として創方されていない処方が皮膚疾患に適用することができるという、無限の可能性を秘めた皮膚科漢方という分野にふれた感動を今も忘れ得ません。

石井正光先生や小林裕美先生の外来につかせていただく機会もありました。アトピー性皮膚炎の患者さんに補中益気湯を出すことが多いように思いました。人参+黄耆配合のお腹を温め気を補い、疲労や倦怠感に対する方剤をなぜ皮膚疾患の患者に処方するのかを疑問に思い、先生方に質問してみました。アトピー性皮膚炎患者の中には、長い

闘病により気虚に陥っていたり、もともと気虚体質であったり、甘味の取りすぎや飲食の不摂生などで気虚を合併している患者が多く、それが疾患の治癒を遷延する場合があるので補中益気湯を使うのだと教えていただきました。皮膚科医は皮膚だけではなく患者の体質や生活習慣まで考慮して処方を考えていることに、華岡清州の残した言葉「内外合一」が脳裏によぎり感動したことも思い出されます。

また、両先生はかつて京橋(大阪府大阪市)にご開業されていた故山本巖先生の教えを受けたこともあり、山本先生のお言葉を私に教えてくださることもありました。その中に、これからの時代、漢方薬を科学的に検証していくことが大事であると言われたそうです。当科からも漢方薬、特に補中益気湯の研究成果はいくつか発信しております。

補中益気湯(医王湯)について

補中益気湯は金元四大家の一人、李東垣が創方した処方でもととは内傷による熱を取ることを目標に作られ『内外傷辨惑論』や『脾胃論』に記載されている処方であることは知られています。それまでの『和剂局方』の補剤のようにただ補うだけではなく、金元医学特有の気を補いながら清熱をする方意をもち、伝統医学に虚熱の概念が新しくできつつある時代に創られた処方です。山本巖先生の著書を読みますと、補中益気湯を創ったときの李東垣のエピソードが載っています²⁾。李東垣が役人として赴任した街が敵軍に取り囲まれ、食糧不足のうえ労役が重なって弱ったところに過食することによって内傷の熱を発症すると書かれています。アトピー性皮膚炎患者の中には、長年のストレスにより疲弊したり、暴飲暴食して脾胃が弱っている人も多く、また皮膚炎なので体表に熱証を呈していることから、補中益気湯も有効なのはなるほど頷けます。

一方、この処方は「医王湯」の異名を持つことも知られています。田代三喜の渡明により金元医学がわが国へ持ちこまれ、その弟子曲直瀬道三一門へと受け継がれました。真柳先生の論文によれば、曲直瀬正純の門下、大坂の聚楽町で開業した古林見宜(1579-1657)の書に「東垣配剤のうち随一の方にして、即ち脾胃を補う医の中に王道の妙剤な

り、故に先輩、医王湯と名づく。」とあります³⁾。医王湯の異名は古林見宜の先輩の誰かがつけたのでしょうか、それが誰か調べたのですが判明しませんでした。曲直瀬玄朔の門下の長沢道寿(?-1637)は補中益気湯を多用したことが知られており、おそらく長沢道寿などこのころの曲直瀬流医門の兄弟子の中のどなたかが名付けたのだらうと想像しています。

ところで、気になる「医王」という言葉は、日常生活でまれにみられます。石川県に住んでいたことのある私は、金沢市から北にドライブしていたところ、医王山という場所に出かけた記憶があります。それは石川県金沢市と富山県南砺市にまたがる標高約900mの山塊のことをいいます。山岳信仰の霊山として開かれた医王山は、今でも約120種の薬草、たとえば健胃薬のキハダ、去痰薬のトチバナニンジン、口内炎に効くキンミズヒキなど、古来より生薬の宝庫であったということがこの地名の由来となったようです⁴⁾。

また、前田藩が治める時代では、戸室石(医王石)という安山岩の一種が採れ、金沢城の石垣や兼六園の石橋などに使用されているとのこと。

私は学生時代から神社仏閣を巡るのが好きで、休日になるとお寺や神社を巡っていました。各地のお寺の「医王殿」には「医王仏」といわれる薬師瑠璃光如来(薬師如来)がおられます。阿弥陀仏の来世利益を求める信仰に対して、お薬師さんは現世利益を求める信仰のもと拝まれた如来で、菩薩時代に病に苦しむ人々を救う12の大願を立て修行をされたといわれております。607年に用明天皇が病に臥した際、推古天皇、聖徳太子が病氣平癒を発願して建立したのは法隆寺金堂の薬師如来像です。680年に鶴野讃良皇后の病氣平癒を祈願して天武天皇が建立したのが薬師寺であるように、病人を救ってくれるように祈ってこの像が建

てられました。薬師如来像の特長は手に薬壺を持っておられることです。どのような病氣も治すという霊薬が入っており、もう片方の手は「施無畏印」という手のひらを相手方に向けて軽く指を曲げた状態になっています。ちょうどその姿は軟膏壺を持って軟膏を患者に塗布するやさしい皮膚科医の姿を連想させ、私は学生時代からなんとなく皮膚科を志す気持ちになっていたのかもしれません。

医王谷という地名が京都にあるそうです。日本最古の医書、『医心方』を著した丹波康頼の薬草園があったところとされています。このように「医王」は医を主るものにつけられた名であったことがわかります。

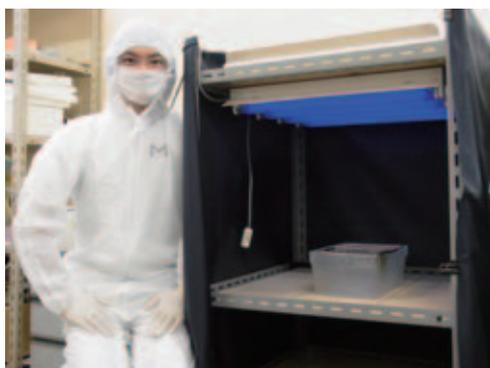
医王の話はさておき、補中益気湯に話を戻しますと、わが国に伝わった補中益気湯は多くの医師に使われ、医案集も残っています。「手足痿弱、攣痛、半身不遂」(上田山沢『切要方義』)、「口中白沫、食に滋味を失す、口に熱湯を好む」(津田玄仙『百方口訣集』)、「諸痔、脱肛の類」(浅田宗伯『勿誤薬室方函口訣』)など、補中益気湯はわが国で開発された口訣によりその適応が拡大していきます。

補中益気湯の皮膚に対する効果

現在、補中益気湯に対する臨床エビデンスが続々と報告されております。皮膚に関するものはまだ少ないですが、当科からは小林らによる二重盲検ランダム化比較試験での気虚を伴うアトピー性皮膚炎に対する補中益気湯の有効性の報告が出ており⁵⁾、皮膚病にも効果があることが証明されました。現代科学的に補中益気湯を検証した実験データも多数あります。その中で田宮らがマウスの実験で、拘束ストレスを与えたマウスの皮膚バリア障害が補中益気湯を投与することにより軽減したという実験結果を報告しました⁶⁾。このように臨床的にも実験レベルでも補中益気湯が皮膚に効くことが証明されつつあります。

大学院に進んだ私は、何らかの方法で補中益気湯の皮膚に対する効果を自分で確かめたいと考え、実験はヘアレスマウスを用いて背中に紫外線を照射することを思いつきました。紫外線照射による活性酸素ストレスモデルマウスです。当てる時間はほんの数秒で、強さはMED(最小紅斑量)以下です。こうすることにより精神的、肉体的ストレスなどの疲労につながるストレスを与えることなく、皮膚だけに負荷をかけることができます。さらに体毛がないので均一に照射が可能であり、しかもセロハンテープで皮膚を採取したり計測器を当てるのが簡便になります。図1のような実験スケジュールを組み立て

自作の紫外線照射装置と筆者



ました。詳細な概要は論文本文をご参照ください⁷⁾。補中益気湯を餌に混ぜて1週間投与し、紫外線を背部に照射します。そして4日後に皮膚を計測しました。皮膚バリア障害が紫外線照射により生じ、経表皮水分損失は増加して、角質層水分含有率は低下しますが、補中益気湯はこれを有意に抑制することが皮膚計測によりわかりました。また紫外線ダメージによりマウス背部からテープストリッピング法により剥がしてきた角層のカタラーゼ活性は低下して、カルボニル化蛋白は増加しますが、補中益気湯はこれを有意に抑制して、マウスの皮膚を守ったことが証明されました。図2に示すのはカルボニル化蛋白染色の蛍光顕微鏡写真です。紫外線照射したマウスから採れた角層は、カルボニル化蛋白が多く、明るく染まり、しかもシート状にまとまって剥がれています。補中益気湯を与えたマウスの角層は、目視であっても顕著にそれを抑制しています。またそれらの結果は、皮膚検体のRT-PCR法の結果から、補中益気湯の抗炎症作用から来ていると類推されました。結果をシェーマにしたものを図3に示します。皮膚紫外線照射に

よる活性酸素ストレスを補中益気湯が有意に抑制したことが明らかになり、医王湯が医王湯と呼ばれる由縁の一つを発見したと思っております。まさにここで「活物窮理」が一つの実を結びました。今後もこのように古来の知恵を科学の側面から検証していきたいと思っております。

図1 実験スケジュール

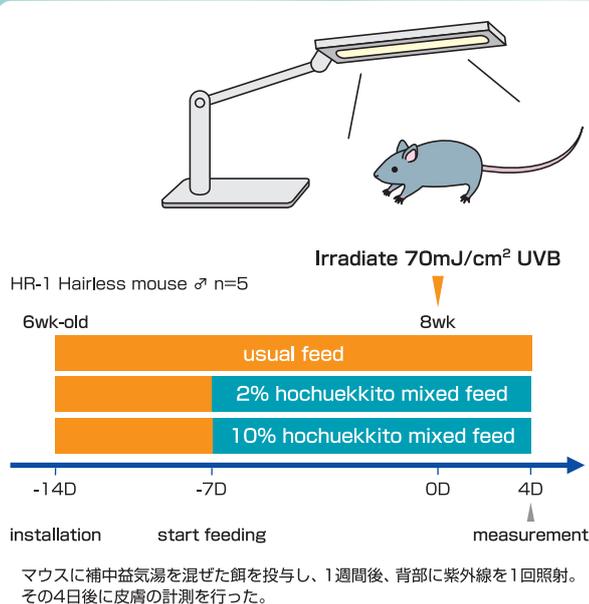


図2 カルボニル化蛋白の蛍光染色顕微鏡写真

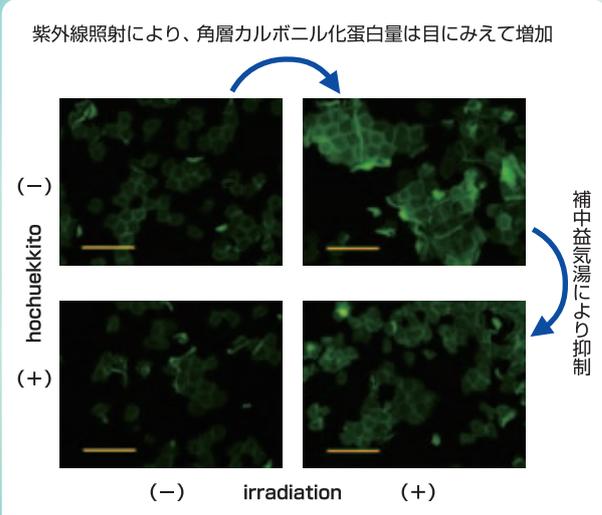
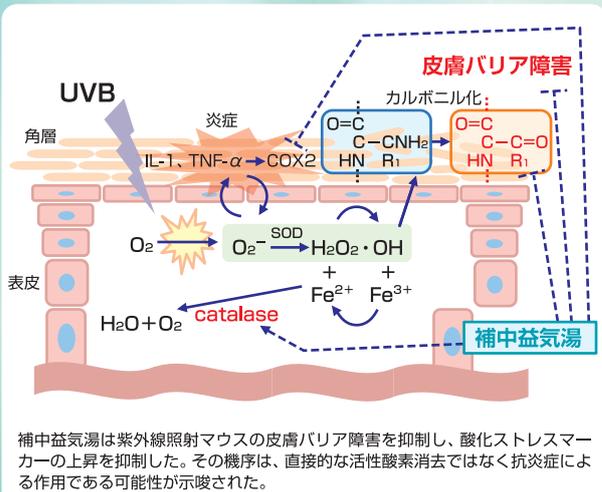


図3 補中益気湯の抗炎症作用にみる皮膚バリア障害抑制機能



【参考文献】

- 1) 高山宏世: 腹證圖解 漢方常用處法解説 新訂27版, 日本漢方振興会漢方三考塾, 2010
- 2) 山本巖: 東医雑録(3) オンアモンド版, 燎原書店: 139-159, 2004
- 3) 真柳誠: 補中益気湯の歴史, 漢方医学, 31(3), 別冊: 42-47, 2007
- 4) 石川化学教育研究会編 科学風土記 pp. 117-118, 裳華房, 1997 東京都
- 5) Kobayashi H, et al.: Efficacy and Safety of a Traditional Herbal Medicine, Hochuekkito in the Long-term Management of Kikyo (Delicate Constitution) Patients with Atopic Dermatitis: A 6-month, Multicenter, Double-blind, Randomized, Placebo-controlled Study. Evid Based Complement Alternat Med. 2010; 7: 367-373
- 6) 田宮久詩 ほか: 拘束ストレスによる生体反応変化と皮膚バリア機能障害回復に対する補中益気湯の効果, J Traditional Medicine, 24 Sup: 112, 2007
- 7) Yanagihara S et al.: Protective effect of hochuekkito, a Kampo prescription, against ultraviolet B irradiation-induced skin damage in hairless mice, J Dermatol, 40: 201-6, 2013